

中学生の求める学校図書館ニーズと学校司書に求める支援の要素： 公立・国立の中学校2校の比較を通して

教育学科 松戸宏予

抄録

本研究では、学校図書館の利用者支援に必要な手だてを明らかにすることを目的とする。この目的を明らかにするため、①生徒の学校図書館に求めるニーズ、②学校司書に求める支援の要素とは何かを、課題として設定した。

方法として、公立A中学校479名と国立B中学校399名の生徒を対象に、質問紙調査を行い、統計手法を用いて2校の比較を試みた。

その結果、2校の事例範囲ではあるが、生徒は学校図書館に「くつろぎ」と「調べやすさ」を求めている。また、「いごち」と「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」の支援要因については、環境的整備、学校司書との関わりが影響していることが明らかになった。生徒が学校司書に求めるものは『個を尊重した配慮』、『学習支援の手だて』、『環境整備の工夫』と、3つの因子が抽出された。

Key Words：学校図書館，中学校，生徒のニーズ，支援要素

1 はじめに

筆者は1998年4月から2006年3月までの8年間、非常勤の学校司書として公立A中学校（以下、A中学校）の学校図書館に5年間、国立大学附属B中学校（以下、B中学校）の学校図書館に3年間勤務した経験を持つ。どちらの学校でも、当初は、学校図書館の機能をいかに活性化させるかといった側面に主眼を置いていた。

しかし、学校図書館の利用者が増加するにつれて、多様な生徒が存在していることに気がつき始めた。どちらの学校も通常学級のみ構成（特別支援学級の設置はない）である。しかし、状況によっては、個別の配慮が必要とされる生徒もいた。例えば、どちらの学校においても、

不登校傾向にある生徒、クラスでいじめにあう生徒、ADHDの生徒などが在籍していた。また、健常児であっても、普段は、図書館でにぎやかに意思表示をする生徒が、授業時の調べ学習で図書館へ学級全員で来館した場合、どこにいるのかわからない、場のなかでうまっているのか、とても大人しいことに気がついた。教室と学校図書館において生徒の表情が異なっていたのである。このように学校の集団は、多様な生徒によって構成されていた。

では、多様な生徒を総体としたうえで、生徒は学校図書館、あるいは学校図書館担当者に対してどのようなニーズを求めているのか。

実際の利用目的ではないが、第46回学校読書調査（2001年）¹⁾の中学生が学校図書館に

対する要望として次の項目を挙げていた(複数回答)。1位「CDやテープで音楽が聴けるところ」54.4%，2位「くつろげる場所」「自分たちが使えるコンピューター」各49.1%である。

一方、米国において中学生の学校図書館に対する利用目的を調査した研究に、オラベク(Oravec, Kristen D.)の事例調査がある²⁾。

オラベクは1997年に公立のウッドリッジミドルスクール校(Wood ridge Middle School)の6年生から8年生120名を対象(内、118名の回答)に学校図書館の利用目的に関する質問紙調査を行った。この調査は学校図書館サービスの質を主眼にしている。複数回答であるが、生徒は学校図書館で宿題を行い(61%)、コンピューターで遊び(61%)、雑誌を読む(50%)傾向にある。オラベクは、この結果を踏まえて、多くの生徒は学校図書館の静かでリラックスできる環境を好んでいたことを指摘している³⁾。

また、久野は学校図書館を「第三の場」として、安らぎの「私的領域」として、生徒たちに「体験され生きられている」生活空間であったことを指摘している⁴⁾。

以上の先行研究(日本の学校読書調査、そして、オラベクや久野の研究)は、中学生の学校図書館利用目的の結果を示してはいる。しかし、利用者の潜在的なニーズの根底には、どのような要因があるのかについては、示していない。

前述したように、学校における集団は多様な生徒により構成されている。教室と図書館では表情の異なる生徒も在籍していることも念頭におき、本稿では事例研究として2校(公立A中学校と国立大学付属B中学校)の生徒を対象に、学校図書館における利用者支援に必要な手だてとは何かを明らかにする。この目的を明らかにするために、以下2点の課題を設定し、2校の比較分析を行う。

①. 2校に所属する中学生が学校図書館に対し

て顕在的、潜在的に抱いているニーズは何か。

②. 学校司書に求める支援の要素は何か。

これら2つの課題の明確化を通して、本研究は、学校図書館における学校司書の支援の向上、ひいては生徒の生涯学習者としての図書館活用への検討にもつながるものと考えられる。

なお、本研究における学校司書とは常勤・非常勤ではあっても、直接、学校図書館の実務に携わる専門職員を指す。

2 方法

2.1 質問紙調査

生徒の学校図書館に求めるニーズと学校司書に求める支援の要素を探るため、A中学校の生徒479名(内、回答数410)と、B中学校399名(内、回答数396)を対象に、選択形式(5件法)の質問紙調査を用いる。

A中学校では2003年5月に、B中学校は2004年6月にそれぞれ調査を実施した。その際、まず、学校長に依頼し、図書委員会を通して各学級で調査を行なう。ただし、調査は学級の状況や生徒の任意に基づくため、生徒の対象数と回答数が異なる。回答は統計処理をする関係で、すべて選択式とする。

2.2 調査項目

本稿で取り扱う調査項目は4項目である。生徒の現状、学校図書館支援の有益度、学校図書館における満足度、学校図書館への期待である。以下、詳細を述べる。

2.2.1 生徒の現状

生徒の現状を問うため、学校図書館の「図書館の利用度」と、「調べの対処」を設定する。

「図書館の利用度」では順序尺度として、利用の程度を問う(5件法:1.授業以外で利用したことがない~5.ほとんど毎日)。

「調べの対処」では、設問として「レファレ

ンスの相談」(5件法:1. 相談しない~5. 相談する)と、「索引の利用」(5件法:1. 使わない~5. よく使う)を設ける。

2.2.2 学校図書館支援の有益度

(1) 学校図書館支援の有益度

学校司書が日常の学校図書館業務のなかで行っている支援について、生徒はどのような支

援が役に立つと感じているのか、学校図書館支援の有益度を尋ねた(以下、支援有益度)。

支援有益度の項目は、生徒への対応配慮、学校図書館環境、利用者教育、レファレンス対応の観点から17項目である(表1参照)。

質問群の回答は5件法(1‘役に立たない’~5‘役に立つ’)で評定を求め、評価の程度が高い方から5~1点を与え、間隔尺度とみなした。

表1 支援有益度の項目

#	支援有益度評価の項目	支援有益度評価項目を簡略化したもの
1	学習参考書(学習マンガを含む)をそろえる。	学習参考書の揃え
2	図書館便りには、文字は読みやすい大きさに漢字には、ふりがなをつける。	図書館便りなど読みやすい文字の大きさとルビ
3	マンガや、写真、イラストは多くページ数が少なく読みやすい本(軽読書)や雑誌をそろえる。	マンガや軽読書の揃え
4	英語学習のテープやビデオ・朗読テープなどをそろえる。	視聴覚資料の整備
5	「児童生徒」がコンピューターでローマ字入力する場合、ブラインドタッチの練習ソフトや、ローマ字や特殊キーの対応表など、環境整備を整える。	ローマ字対応表などコンピューターの利用支援
6	「本を読みたい」と相談したときに、自分の興味や関心にそって2~3冊の本のあらすじを紹介してもらい、選ぶことができる。	読書相談
7	オリエンテーションのとき、あるいは個別に索引の使い方や本の分類、コンピューターの操作を習う。	オリエンテーションや個々の場面の利用者教育
8	調べ学習では、調べ方の方法をプリントや表で紹介する。	調べ手順
9	カーペットなど、くつろいで本を読めるコーナーや植物、本のキャラクターグッズなどをおいて落ちつけるようにする。	落ち着ける環境の工夫
10	質問したときに、「~について、知りたいのね。」と自分の言ったことを、たしかめてもらえる。	レファレンス時の対応配慮
11	本の相談や、知りたい情報についてたずねることをレファレンスといいます。わからないことをたずねるのは恥ずかしいことではないと、みんなにアピールする。	レファレンスのアピール
12	パズル、カルタ、百人一首、将棋、囲碁などをそろえる。	パズル・カルタなど教具資料の揃え
13	騒いだりしたときには、注意するときにはまず「こんなときどうしたら良いの?」と気づかせてほしい。	注意対処
14	図書委員やボランティアとしてかつやくできる自分にあつた役割をもらう。	「児童生徒」の適性に応じた役割分担
15	ブックトークや絵本の読みあいを通して、リラックスできる。	ブックトークによるリラックス
16	本以外のことではあってもちょっとした話を聞いてもらう。	カウンセリングマインドを伴った傾聴
17	さまざまな人が世の中にいることを知るために福祉・障害児理解のコーナーをつくる。	障害児理解を目的とした啓発

(2) 支援有益度の項目設定

まず、支援有益度項目を設定するうえで、市川市教育センターが作成した『市川市における学校図書館の具体的な仕事分担(例)表』⁵⁾を援用した。

市川市では、司書教諭と学校司書の連携による学校図書館運営を重視している。そして、司書教諭・学校司書が学校図書館に携わるうえで担う主な業務を示していたことから、支援有益度尺度の項目の基本軸とした。

基本軸とした項目は、学校司書が生徒に直接、あるいは間接的に経営的活動、技術的活動、奉仕的活動、そして図書館利用者教育に関わる業務である。

経営的活動では「施設・設備の管理と整備」、技術的活動では「図書館資料の選択と収集」、「視聴覚資料・ソフトウェア資料等の整理と管理」、奉仕的活動では「レファレンス・サービス」、「読書相談」、「資料の紹介と案内」、「図書館利用案内」、「広報活動」、「教員への資料・情報提供」、教育指導的活動では「読書指導・利用教育の実施」、「閲覧及び資料利用の助言と指導」、「図書委員会の指導」、「読書会・研究会・資料展示等の図書館行事」を抽出した。

さらに、支援有益度項目の具体的な内容については、学校図書館研究者や学校図書館担当者、学校心理学者らの研究や実践にもとづく、具体的な支援の提案を参考にした⁶⁾。

なお、内容的妥当性、及びワーディングに関する検討を、東京学芸大学大学院学校教育専攻の大学院生6名、現職の学校司書3名で、延べ10回に渡って行った。

2.2.3 学校図書館への期待

中学生の学校図書館に求めるニーズを探るため、学校図書館への期待については、「学校図書館に何を求めるか」と、予想される回答(選択肢)を7つ用意し2つ以内の複数回答を求め

た。選択肢は、以下の通り。

1. 心がくつろぎ、リラックスできる場
2. 調べやすさ(コンピューターを含む)
3. 友だち、教科の先生、図書館員とのコミュニケーションの場
4. ひとりで、グループで学習できる場
5. ボランティアや図書委員として活躍^{かつやく}できる場
6. 読書ができる場
7. その他

2.2.4 学校図書館における満足度

学校図書館における満足度について、2つの側面から設定した。第1は「調べ学習を行ううえでの学校図書館の使いやすさの程度」、第2は「リラックスをするうえでの学校図書館のいごちの程度」についてである。

これら2つの設定は、次の2点に依拠する。第1は、学校図書館が学習センターとしての機能が求められていること⁷⁾。第2は、図書館を「心のオアシス⁸⁾」と文部科学省が捉えていたことによる。

2つの質問群の回答は、5件法(1‘満足していない’～5‘満足している’)で評定を求め、評価の程度が高い方から5～1点を与え、間隔尺度とみなした。

2.3 研究の枠組

表2は、学校図書館の利用者支援に必要な手だてについて示唆を得るため、研究の枠組みを示したものである。A中学校・B中学校の生徒を対象に、A中学校・B中学校の比較を通して分析を行う。分析は、記述統計法を用いる。本研究を、以下の枠組みに沿って進める。

表2 研究の枠組：学校図書館の利用者支援に必要な手だてを明らかにするために

#	明らかにしたい点	設定項目	項目数	分析方法	備考
1	生徒の現状	・ 図書館の利用頻度 ・ 調べの対処 ①レファレンスの相談 ②索引の利用	1項目 (5件法) 2項目 (5件法)	単純集計 5件法であるが、集計では「3. どちらともいえない」を除き、集計する。	参考調査 x^2 検定
2	役立つ図書館支援とは	支援有益度評価	17項目 (5件法)	単純集計 (平均値・SD)	t 検定
3	学校図書館に期待するもの	学校図書館に期待する項目	選択7項目	単純集計 (2つ以内の複数回答)	x^2 検定
4	生徒の「学校図書館における満足度」に影響を与える支援とは	・ 学校図書館における満足度 ①「調べ学習を行ううえでの学校図書館の使いやすさの程度」 ②「リラックスをするうえでの学校図書館のいごちの程度」	満足度2項目 (5件法) 支援有益度 17項目 (5件法)	重回帰分析 ①従属変数：(調べ学習) 図書館の使いやすさ 独立変数：支援有益度 ②従属変数：いごち 独立変数：支援有益度	
5	学校司書に求める支援とは	支援有益度評価	17項目 (5件法)	因子分析 (主因子法)	潜在的な要因

(1) 参考：A中学校・B中学校の生徒の現状

目的を明らかにするうえで、参考としてA中学校・B中学校の生徒の「図書館の利用度」や「調べの対処」について現状を明らかにする。「調べの対処」では、「レファレンスの相談」の程度と「索引の利用」を単純集計する。なお、集計では、5件尺度の「3. どちらともいえない」を抜いて行う。

(2) 役立つ図書館支援とは

どのような支援が役立つかを明らかにするため、生徒の支援有益度評価を求める。

A中学校とB中学校の支援有益度評価の検討を行うために、支援有益度尺度を用いて各支援項目の平均値と標準偏差を算出する。そして、A中学校とB中学校の生徒の支援有益度評価の平均値に差がみられるかについてt検定を用いて検討する。

(3) 学校図書館に期待するもの

生徒のニーズを明らかにするため、学校図書館に期待するものを複数回答で求める（顕在的要因）。

顕在的なニーズを捉えるために、「学校図書館に期待するもの」の多重回答からニーズの高い項目を把握する。

(4) 生徒の「学校図書館における満足度」に影響がある支援とは

重回帰分析で、生徒の「学校図書館における満足度」に影響があると思われる要因を検討する。

「学校図書館における満足度」は2つの設問からなる。「リラックスをするうえで学校図書館に感じるいごちの程度」（以後、「いごち」と、「調べ学習を行ううえでの学校図書館の使いやすさの程度」（以後、「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」である。

この「いごち」、「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」それぞれに、どの「支援有益度評価」項目が影響しているかを重回帰分析で試みる。

「いごち」の要因については、生徒の支援有益度評価項目を独立変数に、生徒が「リラックスをするうえで学校図書館に感じるいごち

の程度」を従属変数としてステップ・ワイズ方式の回帰分析を行う。

「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」の要因については、生徒の支援有益度評価項目を独立変数に、生徒が「調べ学習を行ううえでの学校図書館の使いやすさの程度」を従属変数としてステップ・ワイズ方式の回帰分析を行う。

(5) 学校司書に求める支援とは

潜在的なニーズを捉えるために、学校司書にどのような支援の要素が求められているかを探るため、A中学校とB中学校の支援有益度評価のデータをもとに因子分析を行う。

なお、研究の限界として、結果はA中学校とB中学校に限定しているため事例研究の範囲内である。しかし、生徒の求めるニーズについては、一定の傾向が窺えるものとして報告する。

2.4 対象校の背景

2.4.1 A中学校

A中学校は、2003年当時13学級で構成される479名⁹⁾の公立の通常学校である。東京近郊に位置するが、学校の周りには畑や貯水池があり、野鳥が多い。

教員の共通した言によれば、A中学校に在籍する生徒は、全体的に素直な生徒が多い。しかし、通常学級に2～3名の割合でLD、ADHD、高機能自閉症が含まれている。進学は、市内にある公立高校と、私立高校が主な進路先である。

調べ学習や総合的な学習の時間においては、教科や学年によって学校司書との連携の程度に差がみられた。

なお、A中学校が所属する自治体では、公共図書館、学校図書館ともに、読書教育に力を入れており、生徒は幼少期から図書館を利用する環境にある。学校図書館のネットワーク環境も、物流、情報ともに整っている。

2.4.2 B中学校

一方、B中学校は、2004年当時12学級で構成される399名¹⁰⁾の国立大学の附属中学校である。東京都内にあり、学校の周りは住宅が密集している。教育の特色として、国際理解教育に重点をおいている。1年時は、帰国子女向けの学級があり、2年時から混合学級となる。

教員の共通した言によれば、教育熱心な家庭が多く、進学は国立大学附属高校のほか、私立大学附属、都立高校が主な進路先である。しかし、通常学級に在籍する生徒のなかには、一定の学力を有しながらも、不登校傾向、拒食症、いじめなどで保健室に通う生徒も含まれる。

学校図書館の状況については、2003年から非常勤の学校司書が配置されたが、資料整備など物理的な環境は調査時の段階(2004年6月)では、まだ十分とは言えない状況にある。附属小学校では学校司書はおらず、生徒の利用は定着していない。

なお、調べの対処など学習の手順を含めた学習スキルの教示については、教職員の共通理解が行われている。そして、「総合的な学習の時間」では生徒が問題解決学習を行うための事前学習を設定している。実際に、この事前学習に担当教員の依頼で学校司書が問題解決の手順を含めた図書館利用者教育を担当することもあった。

3 結果

まず、目的を明らかにするための参考として学校図書館における生徒の現状を述べる。そのため、3.1のみ、結果にもとづいた考察も含める。

3.1 参考調査：学校図書館における生徒の現状

3.1.1 生徒の図書館利用頻度

生徒の学校図書館利用頻度については、相対的にA中学校の生徒が、B中学校の生徒よりも

高い傾向にある ($\chi^2(4, N=769) = 121.169, p < .01$)。

考察として、学校図書館を教育に位置づけている自治体にあるA中学校と、2003年度に非常勤の学校司書が配置されても物理的な環境はまだ十分とは言えないB中学校の背景があるものと推察する。

3.1.2 調べの対処

学校司書は、調べ学習や総合的な学習の時間、あるいは個人的なレファレンスで、生徒に対応する場面がある。調べの対処の観点から、生徒の主観的な回答によるものだが、レファレンスの相談と索引の利用について眺めた。

(1) レファレンスの相談

表3はレファレンスの相談について示したものである。「どちらでもない」回答を外したA

中学校の場合、「相談しない」「あまり相談しない」は88.6%、B中学校の場合も77.5%であった。

一方、「ときどき相談する」「相談する」ではA中学校では11.5%なのに対し、B中学校では22.4%であった ($\chi^2(4, N=788) = 26.009, p < .01$)。

考察として、どちらも、生徒の8割がレファレンスの相談をしていないことが窺われる。

(2) 索引の利用

表4は索引の利用について示したものである。「どちらでもない」回答を外したA中学校の場合、「使わない」「あまり使わない」は34.2%、B中学校の場合も17.8%であった。しかし、「ときどき相談する」「相談する」ではA中学校では65.9%に対し、B中学校では82.3%で

表3 利用頻度

		ほとんど毎日	週に1～2回	月に1～2回	年に数回	授業以外には利用したことがない	合計
A 中学校	N	91	99	98	70	17	375
	%	24.3	26.4	26.1	18.7	4.5	100.0
B 中学校	N	34	78	88	59	135	394
	%	8.6	19.8	22.3	15.0	34.3	100.0

表4 レファレンスの相談

レファレンスの相談		相談しない	あまり相談しない	ときどき相談する	相談する	合計
A 中学校	N	202	54	23	10	289
	%	69.9	18.7	8.0	3.5	100.0
B 中学校	N	211	41	41	32	325
	%	64.9	12.6	12.6	9.8	100.0

表5 索引の利用

索引の利用		使わない	あまり使わない	たまに使う	よく使う	合計
A 中学校	N	70	28	94	95	287
	%	24.4	9.8	32.8	33.1	100.0
B 中学校	N	52	10	100	188	350
	%	14.9	2.9	28.6	53.7	100.0

あった。

考察として、レファレンスの相談とは逆に、索引についてはどちらの学校も生徒の約7割から8割が利用していることが窺える ($\chi^2(4, N=773)=64.930, p<.01$)。

以上のことから、両校の学校図書館における生徒の現状をまとめると、A中学校の生徒はB中学校の生徒に比べて、図書館の利用頻度は高い。しかし、レファレンスの相談や、索引の利用などB中学校の生徒は、A中学校の生徒よりも学習スキルが高い傾向にあることが窺えた。

このような状況を踏まえて、次節以後は、本研究の目的（利用者支援に必要な手だてについて示唆を得る）に沿って生徒の支援有益度評価、学校図書館や学校司書に求めるニーズなどの結果を述べる。

3.2 生徒の支援有益度評価

どのような支援が役立つかを問うた設問（支援有益度評価）では、3項目を除いて、両校の生徒にほとんど差はみられなかった。

3項目とは、「図書館便りなど読みやすい文字の大きさとルビ」、「視聴覚資料の整備」、「ローマ字対応表などコンピューターの利用支援」である。

これらの3項目の支援については、A中学校の生徒はB中学校の生徒よりも評価していた。全体的な傾向として、「学習参考書の揃え」、「マンガや軽読書の揃え」、「落ち着ける環境の工夫」といった支援項目が評価されていた（表6参照）。

表6 生徒の支援有益度評価

No.	支援項目	N1	国立付属B 中学校生徒 意識平均	国立付属B 中学校生徒 意識SD	N2	公立A 中学校生徒 意識平均	公立A 中学校生徒 意識SD	平均値 の差	t	有意 確率
1	学習参考書の揃え	394	3.47	1.21	409	3.44	1.12	0.03	0.389	0.697
2	図書館便りなど読みやすい文字の大きさとルビ	393	2.90	1.25	406	3.09	1.2	-0.19	-2.203	0.028
3	マンガや軽読書の揃え	394	3.47	1.30	408	3.47	1.21	0.00	-0.011	0.991
4	視聴覚資料の整備	394	2.94	1.30	407	3.15	1.21	-0.21	-2.374	0.018
5	ローマ字対応表などコンピューターの利用支援	394	2.82	1.33	410	3.18	1.23	-0.36	-4.005	0.000
6	読書相談	394	3.25	1.35	409	3.11	1.19	0.14	1.485	0.138
7	オリエンテーションや個々の場面の利用者教育	393	3.12	1.27	408	3.05	1.12	0.07	0.830	0.407
8	調べ手順	392	3.29	1.30	403	3.15	1.17	0.14	1.556	0.120
9	落ち着ける環境の工夫	394	3.67	1.38	408	3.58	1.32	0.09	0.885	0.376
10	レファレンス時の対応配慮	390	3.14	1.33	408	3.2	1.24	-0.06	-0.631	0.528
11	レファレンスのアピール	389	2.75	1.24	409	2.86	1.12	-0.11	-1.314	0.189
12	パズル・カルタなど教具資料の揃え	388	3.30	1.33	408	3.25	1.28	0.05	0.532	0.595
13	注意対処	389	2.80	1.27	407	2.96	1.13	-0.16	-1.863	0.063
14	「児童生徒」の適性に応じた役割分担	388	2.72	1.18	407	2.82	1.11	-0.10	-1.127	0.260
15	ブックトークによるリラククス	386	2.77	1.26	403	2.87	1.13	-0.10	-1.192	0.234
16	カウンセリングマインドを伴った傾聴	389	2.82	1.32	408	2.78	1.21	0.04	0.425	0.671
17	障害児理解を目的とした啓発	389	3.18	1.28	408	3.07	1.23	0.11	1.305	0.192

3.3 学校図書館に期待するもの

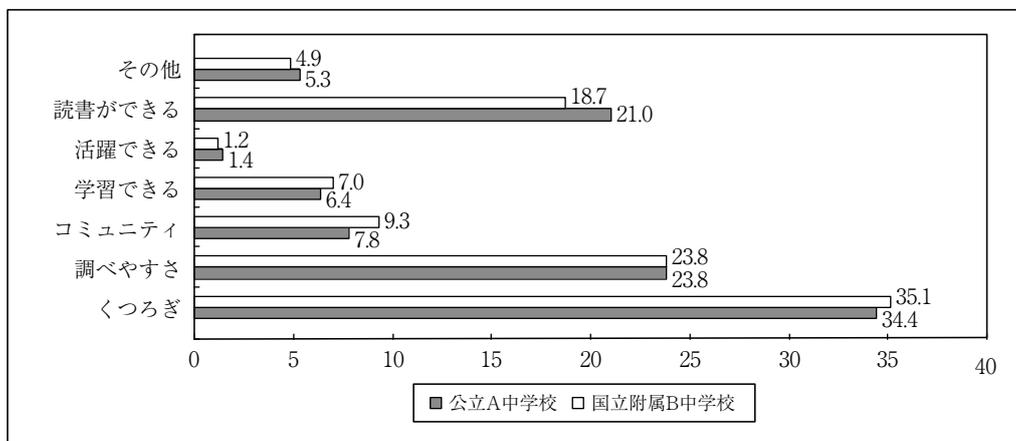


図1 学校図書館への期待（複数回答%）%は各校の回答者数で算出。

図1は、A中学校とB中学校の生徒を対象に学校図書館に期待するものを複数回答で選んでもらった結果を示したものである。期待するものについては、2校とも似た傾向で、学校図書館で「くつろぎ」と、「調べやすさ」を求めている ($\chi^2(6, N=1290)=2.051, n.s.$)。

「くつろぎ」では、A中学校で34.4%、B中学校で35.1%であった。「調べやすさ」では、A中学校・B中学校ともに23.8%であった。

3.4 生徒のニーズに影響をあたえる支援要因

「いごち」と「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」に影響をあたえる支援要因については、A中学校とB中学校では、いくらか異なっていた。

3.4.1 「いごち」に影響をあたえる支援要因

A中学校では、「いごち」に影響をあたえる支援に、学校司書との関わりを媒体とした「ブックトークによるリラックス」、「読書相談」のほか、「落ち着ける環境の工夫」、「パズル・カルタなど教具資料の揃え」など学校図書館の

環境面に関する変数が抽出された(表7-1参照)。

表7-1 A中学校生徒の「いごち」に関する重回帰分析の結果

変数	標準偏回帰係数	p
ブックトークによるリラックス	.149	*
落ち着ける環境の工夫	.144	*
読書相談	.137	*
パズル・カルタなど教具資料の揃え	.135	*
レファレンス時の対応配慮	.143	*

* p<.05
(R2 乗 .292, F (5,354)= 29.227, p<.01)

表7-2 B中学校生徒の「いごち」に関する重回帰分析の結果

変数	標準偏回帰係数	p
カウンセリングマインドを伴った傾聴	.280	**
オリエンテーションや個々の場面の利用者教育	.161	**
ブックトークによるリラックス	.166	**
マンガや軽読書の揃え	.134	**
ローマ字対応表などコンピューターの利用支援	-.108	**

** p<.01
(R2 乗 .252, F (5,369)= 25.951, p<.01)

一方、B中学校では、抽出された上位3つの変数は「カウンセリングマインドを伴った傾聴」、「オリエンテーションや個々の場面の利用者教育」、「ブックトークによるリラックス」だった。

また、「ローマ字対応表などコンピューターの利用支援」は、「いごこち」には、抑制的な(マイナスの)方向にやや傾いていた(表7-2参照)。

3.4.2 (調べ学習) 図書館の使いやすさに影響をあたえる支援要因

A中学校では、「(調べ学習) 図書館の使いやすさに影響をあたえる支援に、学校司書との関わりを媒体とした「レファレンス時の対応配

表8-1 A中学校生徒の「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」に関する重回帰分析の結果

変数	標準偏回帰係数	p
レファレンス時の対応配慮	.157	*
学習参考書の揃え	.186	*
ブックトークによるリラックス	.152	*
読書相談	.132	*
視聴覚資料の整備	.117	*

*p<.05, **p<.01
(R2 乗 .313, F (5,359)= 32.642, p<.01)

表8-2 B中学校生徒の「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」に関する重回帰分析の結果

変数	標準偏回帰係数	p
ブックトークによるリラックス	.211	**
読書相談	.202	**
カウンセリングマインドを伴った傾聴	.143	**
学習参考書の揃え	.130	**
ローマ字対応表などコンピューターの利用支援	-.138	**
注意対処	.125	**

**p<.01
(R2 乗 .294, F (6,369)= 26.648, p<.01)

慮」のほか、「学習参考書の揃え」など具体的な学習関連に関する変数が抽出された(表8-1参照)。

一方、B中学校では、「ブックトークによるリラックス」、「カウンセリングマインドを伴った傾聴」、「学習参考書の揃え」が上位3つの変数として抽出された。

しかし、「ローマ字対応表などコンピューターの利用支援」は、「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」には、抑制的な(マイナスの)方向にやや傾いていた(表8-2参照)。

3.5 学校司書に求める支援の要素

次に、生徒が学校司書に求める支援の要素を探るため、A中学校とB中学校の生徒データを

表9 学校司書に求める支援の要素

	個を尊重した配慮	学習支援の手だて	環境の整備工夫
「児童生徒」の適性に応じた役割分担	.865	-.010	-.204
カウンセリングマインドを伴った傾聴	.822	-.100	.045
レファレンスのアピール	.774	.028	-.013
ブックトークによるリラックス	.719	.028	.042
注意対処	.701	.156	-.110
レファレンス時の対応配慮	.658	-.023	.117
障害児理解を目的とした啓発	.591	.122	-.045
読書相談	.533	.137	.106
調べ手順	.424	.255	.088
オリエンテーションや個々の場面の利用者教育	.408	.342	-.006
視聴覚資料の整備	.118	.636	-.036
ローマ字対応表などコンピューターの利用支援	.056	.594	.036
学習参考書の揃え	-.025	.573	.164
図書館便りなど読みやすい文字の大きさとルビ	.172	.442	.075
落ち着ける環境の工夫	.277	-.147	.692
マンガや軽読書の揃え	-.262	.274	.597
パズル・カルタなど教具資料の揃え	.137	.102	.342

因子相関

因子	学習スキルの手だて	環境の整備工夫
個を尊重した配慮	.707	.623
学習スキルの手だて		.637

もとに因子分析を行った。主因子法により3因子を抽出した（初期累積寄与率は58.94%）。

表9はプロマックス回転後の各項目の因子負荷量を示している。因子負荷量の絶対値0.30以上を示す項目群について各因子を解釈し命名した。但し、因子負荷量が0.30以上であっても2個の因子にまたがる項目は因子解釈の確認には利用したが、解釈には除外した（表9参照）。

第1因子には「『児童生徒』の適正に応じた役割分担」、「カウンセリングマインドを伴った傾聴」など9項目が含まれた。これらに共通した因子は、生徒の個を尊重した配慮と考え『個を尊重した配慮』と命名した。

第2因子には「視聴覚資料の整備」や「ローマ字対応表などコンピューターの利用支援」など4項目が含まれた。これらに共通した因子は生徒が学習するうえでの支援に関わるものと考え『学習支援の手だて』と命名した。

第3因子には「落ち着ける環境の工夫」、「マンガや計読書の揃え」など3項目が含まれた。これらに共通した因子は生徒に対する環境の整備工夫と考え、『環境の整備工夫』と命名した。

4 考察

4.1 生徒の学校図書館ニーズ

4.1.1 支援有益度評価の類似的な傾向

本研究の結果からは、公立A中学校と国立大学付属B中学校の支援有益度評価は、ほとんど似た傾向にあった。つまり、生徒の求めるニーズがほぼ同じ傾向にあったのである。

しかし、この生徒の求めるニーズの傾向がほぼ同じ要因については、今回の調査ではあきらかにできなかった。生徒の求めるニーズがほと

んど似た要因は、それぞれの学校に同一の学校司書が関わっていたことによるものなのか、または、生徒のおかれている状況に要因があるのかについてである。今後の課題として、継続して他校への質問紙調査を行うことが必要である。

4.1.2 支援有益度評価の差異項目

学校司書に求める支援の要素の第2因子にあたる『学習支援の手だて』に抽出された4つの項目のうち3項目は、「図書館便りなど読みやすい文字の大きさとルビ」、「視聴覚資料の整備」、「ローマ字対応表などコンピューターの利用支援」であった。

これらの項目は、支援有益度評価では、両校の生徒の間においては差がみられたものである。具体的には、これらの3項目について、A中学校の生徒はB中学校の生徒よりも高く評価していた。このうち、「図書館便りなど読みやすい文字の大きさとルビ」、「ローマ字対応表などコンピューターの利用支援」については、学力的な差も関係があると推察する。

また、「視聴覚資料の整備」については、B中学校の場合、学校司書が学校図書館に携わるまでは、活字資料がほとんどを占めていた。そして、学習図鑑のCD-ROMは数点あったが、ほとんど活用されていなかった。一方、A中学校では授業での利用、視聴覚資料の貸し出しも含めて、視聴覚資料が活用されていた。このような背景の違いが、支援有益度評価にも影響が出たのではないかと推察する。

4.2 学校図書館に期待するもの

学校図書館に期待するものとして、各学校の中学生は、学校図書館に「くつろぎ」と「調べやすさ」を求めている。この結果は、第46回学校読書調査（2001年）¹¹⁾の中学生が学校図書館に対する要望として挙げていた2位「くつ

ろげる場所」を指示するものである。

また、オラベクは学校図書館の静かでリラックスできる環境を多くの生徒が好んでいたことを指摘していたが、本研究の結果も同様であった。本研究は2校の事例調査研究であるが、生徒の学校図書館に求める点に一定の傾向があることが示唆された。

4.3 「いごこち」と「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」に影響を与える支援

中学生が学校図書館に満足しているかを問うた「いごこち」と「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」に影響をあたえる要因を重回帰分析で探った。「いごこち」と「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」に、影響を与える支援項目がA中学校、B中学校では異なっていた。

4.3.1 「いごこち」に影響を与える要因

「いごこち」では、A中学校では「ブックトークによるリラックス」、「落ち着ける環境の工夫」、「読書相談」と、抽出された上位2つの変数は、学校司書との関わりを媒体とする項目であった。しかし、環境整備として「落ち着ける環境の工夫」も抽出されていた。

一方、B中学校で「カウンセリングマインドを伴った傾聴」、「オリエンテーションや個々の場面の利用者教育」、「ブックトークによるリラックス」と、抽出された上位3つの変数は、学校司書との関わりを媒体としたものだった。

4.3.2 「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」に影響を与える要因

(調べ学習) 図書館の使いやすさでは、A中学校では、「レファレンス時の対応配慮」、「学習参考書の揃え」、「ブックトークによるリラックス」抽出された。これら、上位3つの変数は、調べ学習をイメージするものであった。

ブックトークとは「あるテーマに沿って数冊の本を選び、ひとつながりの話題のなかでそれらの本を紹介していく方法」¹²⁾である。現在では『総合的な学習の時間』などの調べ学習にも、ブックトークは広く活用されている¹³⁾。実際に、A中学校においても、ブックトークは各教科の調べ学習の導入に行われていた。

一方、B中学校で下位に抽出された「注意対処」は、学校司書との関わりを媒体としたものだった。A中学校と同じく「学習参考書の揃え」など具体的な学習関連に関する変数も抽出されていた。

4.4 「いごこち」と「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」で重複していた要因

そのうち、表10は表7-1、2と表8-1、2より、「いごこち」と「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」で重複していた要因を抽出したものである。

このなかで、「いごこち」の要因として抽出された「ブックトークによるリラックス」は、「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」の要因にも重複して抽出されていた。

表10 「いごこち」と「図書館の使いやすさ」に重複していた要因

	「いごこち」と「図書館の使いやすさ」に重複していた要因	「いごこち」	「図書館の使いやすさ」
重複1	ブックトークによるリラックス	A中・B中	A中・B中
重複2	読書相談 レファレンス時の対応配慮	A中	A中
重複3	カウンセリングマインドを伴った傾聴 ローマ字対応表などコンピューターの利用支援	B中	B中

他に、A中学校では、「読書相談」「レファレンス時の対応配慮」が、「いごち」の要因と「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」の要因に重複していた。

また、B中学校では、「カウンセリングマインドを伴った傾聴」と「ローマ字対応表などコンピューターの利用支援」が、「いごち」の要因と「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」の要因に重複していた。これらの要因の重複については2点が考えられる。それぞれの中学校図書館の背景と統計的解釈である。

4.4.1 重複1:「ブックトークによるリラックス」

まず、「ブックトークによるリラックス」についてである。4.3でも述べたが、A中学校図書館においても、生徒たちは社会、理科、家庭、国語、美術など教科の調べ学習の時間に学校司書から、調べ学習のテーマについてその都度、ブックトークの紹介を受けていた。そして、学校司書から紹介されていた資料を中心に調べ学習を展開していった経緯があった。

4.4.2 重複2:「読書相談」・「レファレンス時の対応配慮」

次に、「読書相談」についてであるが、A中学校の学校図書館では授業や放課後など楽しみのための読書相談だけでなく、課題解決に関わる相談を受けていた。生徒がリラックスをするうえで学校図書館に感じる「いごちの程度」と生徒が調べ学習を行ううえでの学校図書館の「使いやすさの程度」の関連をみたところ、互いに強い相関があった ($r=.645, p<.01$)。そのため、生徒が学校図書館に求める「調べやすさ」の要因に「ブックトークによるリラックス」, 「読書相談」も含まれたのではないか。

「レファレンス時の対応配慮」の項目は、『(生徒が) 質問した時に「～について、知れた

いのね」と自分の言ったことを、たしかめてもらえる』である。「レファレンス時の対応配慮」は、「調べ学習」のみならず、休み時間など通常の図書館活動においても、よく行われていた。このため、「いごち」や「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」に、重複したと捉える。

4.4.3 重複3:「カウンセリングマインドを伴った傾聴」・「ローマ字対応表などコンピューターの利用支援」

B中学校においても、学校司書が勤務した当初はものめずらしさもあってか、生徒が休憩時間に学校図書館に来館し、学校司書に話しかけてくる場面が多々あった。そして、生徒と学校司書の間でコミュニケーションがとれていくなかで、生徒のなかには「夜眠れない、クラスがうるさい」など悩みを打ち明けてくるようになった。

平行して、「社会」「英語」「知的探求」の授業時間に、学校司書が生徒の調べ学習の相談に対応していった。そのため、「カウンセリングマインドを伴った傾聴」が「調べやすさ」の要因にも含まれたものと思われる。

「ローマ字対応表などコンピューターの利用支援」は、B中学校においても休み時間や授業時などいつでもコンピューターが利用できる環境にあった。ただし、ローマ字対応表を用いずに利用していたことから、抑制(マイナスの)方向に傾いていた。つまり、「いごち」と「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」に必要な支援とは捉えていなかった。

4.5 「調べやすさ」と『学習支援の手だて』

次に、生徒が学校図書館に期待する「調べやすさ」と『学習支援の手だて』について検討する。

学校司書に求める支援の要素の第2因子にあたる『学習支援の手だて』に抽出された4つの

項目のうち3項目「視聴覚資料の整備」、「図書館便りなど読みやすい文字の大きさとルビ」、「ローマ字対応表などコンピューターの利用支援」は、支援有益度評価では両校の生徒の間においては差がみられた。

具体的には、これらの3項目について、A中学校の生徒はB中学校の生徒よりも高く評価していた。このうち、「図書館便りなど読みやすい文字の大きさとルビ」、「ローマ字対応表などコンピューターの利用支援」については、学力的な差も関係があると推察する。なお、学習支援の手だてを講じるうえで、学校の生徒集団の特性にもとづくニーズのみきわめが必要と思われる。そのうえで、図書館利用者教育が必要ではないだろうか。

この点について、オーストラリアのマーレイ (Murray, Janet) は、一人ひとりの個性を尊重したインクルージョン教育の観点から、「特別な教育的ニーズをもつ児童生徒に対しても情報リテラシースキルを効果的に教えていかなければならない。もし、特別な教育的ニーズをもつ生徒が情報へのアクセスが否定されるならば、彼の(彼女の)リテラシーレベルを奪ってしまうことになる」と指摘している¹⁴⁾。

しかし、この図書館利用者教育を行うためには、教員の学校図書館に対する認識が必要不可欠である。例えば、B中学校の場合、2.4.2で述べたが、学校司書は担当教員の依頼で「総合的な学習」の事前学習として図書館利用者教育を行っている。つまり、教員の理解がなければ、図書館利用者教育は実現できなかったであろう。

生徒の情報リテラシースキルの獲得は、図書館利用者教育が教育カリキュラムに位置づけられ、教員と学校司書が連携をいかに図れるかによる。

4.6 学校司書に求める支援の要素との関わり

そして、学校司書に求める支援の要素との関わりについて述べる。「いごち」と「(調べ学習) 図書館の使いやすさ」に関わる要因はともに、学校司書に求める支援の要素で抽出された第1因子にあたる『個を尊重した配慮』と第3因子にあたる『環境整備の工夫』に関わっていた。環境整備も生徒対応もどちらも学校司書の存在なしにはできない支援である。

宮下敏江・石川もよ子¹⁵⁾ は居場所を「自己の存在感を実感でき、精神的に安心していることができ、ありのままの自分を受け入れてくれ、かけがえのない自分の価値を大事にしてくれる場所」と定義している。学校司書に求める支援の要素で、抽出された『個を尊重した配慮』は、宮下らの「居場所」の定義を支持するものである。

以上のことから、学校司書が生徒集団の特性を見極めたうえで、共感理解を示し、『個を尊重した配慮』、『学習支援の手だて』、『環境整備の工夫』を行うことが、いくらかでも生徒の学校図書館ニーズを充足させていくことになると思われる。

5 おわりに

今回の調査は2校の事例研究の範囲内である。しかし、一定の傾向を窺えるものとして、学校図書館の利用者支援に必要な手だてについては、以下の3点が結論としてあげられる。

- ① 全体の傾向として、生徒は学校図書館に「くつろぎ」や「調べやすさ」を求めている。
- ② 生徒が学校図書館に期待する「調べやすさ」では、『学習支援の手だて』を工夫する必要がある。そのためには、学校の生徒集団の特性にもとづくニーズのみきわめが必要ではないか。
- ③ 学校図書館担当に求められているものとし

て「個を尊重した配慮」、『学習支援の手だて』『環境の整備工夫』が、因子分析により抽出された。

ただし、学校図書館における利用者支援に必要な手だてともつながるが、生徒にとって居心地が良いと感じる学校図書館を創り出すために、図書館担当者の支援意識だけでは、十分ではない。

今後の課題として、司書教諭との連携、地域ボランティアの存在、管理職の理解、教育委員会、公共図書館、学校図書館関連のNPOや研究者による後方支援といった全体的なネットワークの検証が必要である。

注

- 1) 毎日新聞社「学校図書館に対する要望」『2001年版読書世論調査』毎日新聞社、2001毎日新聞社、p.126.
- 2) Oravec, Kristen D., "Students in the school Library: A Usage Study of Woodridge Middle School Library," Kent State University, 1997, 53p. Master's Research Paper. (ED413913) <<https://eric.ed.gov/?q=ED413913&id=ED413913>>. [引用日：2017-11-1]
- 3) *ibid.*
- 4) 久野和子『「第三の場」としての学校図書館』『図書館界』63(4), 2011, p.296-313.
- 5) 市川市教育委員会司書教諭発令に関わる検討委員会「市川市における学校図書館の具体的な仕事分担(例)表」1999年。
なお、1999年以降3～4年間は、当該資料は司書教諭、学校司書、学校図書館員に配布されていた。それ以降、学校組織における連携協力として司書教諭、学校司書が互いに助けあうということで、当該資料は配布されていない(元市川市立第八中学校教諭、小林路子氏の談話。2006年11月30日)。
- 6) 松戸宏予「英・米・豪の学校図書館における特別な教育的ニーズをもつ児童生徒への支援の動向と課題：ウォーノック報告から現在まで」『学校図書館学研究』7, 2005, p.5-16.
- 7) 文部科学省. 学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議(第6回)(2016年6月28日)配付資料1. 学校図書館の整備充実に関する審議のまとめ(素案). 3. 学校図書館のガイドライン(仮称)について.(1) 学校図書館の目的・機能. <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/115/shiryo/attach/1373978.htm>. [引用日：2017-11-30]
- 8) 同上. 【参考】小学校施設整備指針(抜粋)第4章15. <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/115/shiryo/attach/1373978.htm>. [引用日：2017-11-30]
- 9) 市川市教育委員会『市川市の教育平成15年版』市川市教育委員会, 2004, p.78.
- 10) 国立大学法人東京学芸大学『平成16事業年度に係る業務の実績に関する報告書』国立大学法人東京学芸大学, 2005, p.48.
- 11) 毎日新聞社, 前掲1)
- 12) 宇原郁世「ブックトーク」『子どもの読書活動をどう進めるか』長倉美恵子編, 教育開発研究所, 2003, p.72.
- 13) 同上, p.72.
- 14) Murray, Janet, "The response of school libraries to the inclusion of students with disabilities in mainstream schools," Monash University, 2000, p.31. Ph.D. thesis.
- 15) 宮下敏恵・石川もよ子「小学校・中学校における心の居場所に関する研究」『上越教育大学研究紀要』vol.24. no.2. 2005, p.783-800.

学校図書館のアンケート

このアンケートは、みなさんが今後、図書館を気軽に利用してもらえるような図書館をめざすうえで参考させていただくものです。どうか協力お願い致します。

* まず、あなた自身についておたずねします。

F1. 性別 (1. 男 2. 女) F2. 学年 (1年 2年 3年)
F3. あなたが小学生になる前に、誰かからおはなしや絵本を読んでもらったり、自動車移動図書館や公共図書館を利用した経験がありますか？小学生になる前は、(日本・海外)にいた。 1. なかった 2. あまりなかった 3. 少しくらいあった 4. よくあった 5. かなりあった
F4. 現在、公共図書館を利用していますか？ 1. 利用していない 2. 年に数回 3. 月に1～2回 4. 週に1～2回 5. ほとんど毎日

Q1. 昨年の6月より学校図書館担当(司書)が週3日はいり、学校図書館が少しずつ変わってきています。学校司書がいなかったときと比べて、学校図書館に行きやすくなりましたか？(中学1年生の場合は、小学校のときと比べて)

1. まったく思わない 2. あまり思わない 3. どちらともいえない 4. まあ思う 5. 思う

Q2. あなたは、現在どのくらいの割合で学校図書館を利用していますか？

1. 授業以外には利用したことがない 2. 年に数回 3. 月に1～2回 4. 週に1～2回 5. ほとんど毎日

↓ (*Q2. で1あるいは2を選んだ方だけにお尋ねします。)

SQ1 学校図書館をあまり利用していない理由は何ですか？(一つだけ)
1. 忙しいから 2. 図書館に興味がないから
3. 読みたい本がないから 4. 本を読むのが苦手、めんどろ
5. 友人に本を借りたり、自分で買うから 6. 行きたいときに図書館があいてない
7. コンピューターを学習以外で使えないから 8. その他 ()

Q3. どんなときに図書館を利用しますか？2つ選んでください。第1位()・第2位()

1. 本を借りる 2. 本(まんがも含む)を読む 3. コンピューターを使う 4. リラックスする 5. 調べごと 6. 利用しない

Q4. あなたが読みたいと思う本が、学校図書館にありますか？(一つだけ)

1. まったく思わない 2. あまり思わない 3. どちらともいえない 4. まあ思う 5. 思う

Q5. それぞれの項目について、最もあてはまるものを1～5のなかから一つだけ選んで○をつけてください。

(1) 探している本が見つからない場合の予約やリクエスト

1. 利用しない 2. あまり利用しない 3. どちらともいえない 4. ときどき利用する 5. 利用する

(2) わからないことがあったときに図書館員に相談する制度をリファレンスといいます。本の相談や知りたい情報など、あなたは図書館員に相談したことがありますか？

1. 相談しない 2. あまり相談しない 3. どちらともいえない 4. ときどき相談する 5. 相談する

↓ (*うへの(2)で1あるいは2を選んだ方だけおたずねします。)

SQ2 あまり相談しない理由は何ですか？(一つだけ)
1. 相談できること(リファレンス)を知らなかった 2. 聞くのがめんどろ
3. 他の人にたずねることで解決する 4. インターネットなどで自分で解決する
5. 担当が忙しそうにみえたから、聞くのをやめた 6. その他 ()

(3) 図鑑や事典では後ろのページに索引があります。索引を使えば、調べたいページがわかりますが、あなたは索引を使ったことがありますか？

- 1 よく使う 2 たまに使う 3 どちらともいえない 4 あまり使わない 5 使わない

(*うえの(3)で、4あるいは5を選んだ方だけこたえてください。)

S Q 3 あまり使わない理由は何ですか？ (一つだけ)	
1. 索引を知らなかった	2. 索引を使うのがめんどろ
3. ともだちに聞いた	4. インターネットを使うため、図鑑や事典を使わない
5. その他 ()	

- (4) 図書館だより 1. 読む 2. まあ読む 3. どちらともいえない 4. あまり読まない 5. 読まない

Q6. 以下の図書館サービスは、あなたにとって

どのくらい役に立つと思われるか？

それぞれあてはまるものに○をつけてください。

	あまり役に立たない	どちらともいえない	やや役に立つ	役に立つ
	1	2	3	4
(1) 学習参考書(学習マンガを含む)をそろえる。	1	2	3	4
(2) 図書館便りには、文字は読みやすい大きさで漢字には、ふりがなをつける。	1	2	3	4
(3) マンガや、写真、イラストは多くページ数が少なく読みやすい本(軽読書)や雑誌をそろえる。	1	2	3	4
(4) 英語学習のテープやビデオ・朗読テープなどをそろえる。	1	2	3	4
(5) ローマ字入力が覚えられる「特打」・「打モモ」のコンピューターソフトや、ローマ字対応表をそろえる。	1	2	3	4
(6) 「本を読みたい」と相談したときに、自分の興味や関心にそって2~3冊の本のあらすじを紹介してもらい、選ぶことができる。	1	2	3	4
(7) オリエンテーションのとき、あるいは個別に索引の使い方や本の分類、コンピューターの操作を習う。	1	2	3	4
(8) 調べ学習では、調べ方の方法をプリントや表で紹介する。	1	2	3	4
(9) カーペットなど、くつろいで本を読めるコーナーや植物、本のキャラクターグッズなどをおいて落ちつけるようにする。	1	2	3	4

→→→ うらのページもおねがいします。

- | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|--|--|---|---|---|---|
| (10) 質問したときに、「～について、知りたいのね。」と自分の言ったことを、たしかめてもらえる。 | <small>あまり どちらとも やや</small>
<small>役に立たない 役に立たない いえない 役に立つ 役に立つ</small> | | | | |
| (11) 本の相談や、知りたい情報についてたずねることをレファレンスといいます。わからないことをたずねるのは恥ずかしいことではないと、みんなにアピールする。 | <small>1 2 3 4 5</small> | | | | |
| (12) パズル、カルタ、百人一首、将棋、囲碁などをそろえる。 | <small>1 2 3 4 5</small> | | | | |
| (13) 騒いだりしたときには、注意するときにまず「こんなときどうしたら良いの？」と気づかせてほしい。 | <small>1 2 3 4 5</small> | | | | |
| (14) 図書委員やボランティアとしてかつやくできる自分にあった役割をもらおう。 | <small>1 2 3 4 5</small> | | | | |
| (15) ブックトークや絵本の読みあいを通して、リラックスできる。 | <small>1 2 3 4 5</small> | | | | |
| (16) 本以外のことではあってもちよつとした話を聞いてもらおう。 | <small>1 2 3 4 5</small> | | | | |
| (17) さまざまな人が世の中にいることを知るために福祉・障害児理解のコーナーをつくる。 | <small>1 2 3 4 5</small> | | | | |

Q 7. 調べ学習などをするうえで、図書館の使いやすさはどうですか？

1. 満足していない 2. あまり満足していない 3. どちらともいえない 4. まあ満足している 5. 満足している
1を選んだ場合、理由があれば ()

Q 8. 気持ちをリラックスするうえで、図書館のいごちはどうですか？

1. 満足していない 2. あまり満足していない 3. どちらともいえない 4. まあ満足している 5. 満足している
1を選んだ場合、理由があれば ()

Q 9. あなたが図書館にあれば良いと思う本や雑誌は、どんな内容のものですか？(2つ以内)

1. ファッション 2. 小説 3. スポーツ 4. 学習関連 5. 音楽 6. パソコン 7. 料理・手芸 8. 映画
10. 英語などで書かれた小説 11. その他 ()

Q10. 最後に、あなたは学校図書館に何を求めますか？2つ以内で○をつけてください。

1. 心がくつろぎ、リラックスできる場
2. 調べやすさ (コンピューターを含む)
3. 友だち、教科の先生、図書館員とのコミュニケーションの場
4. ひとりで、グループで学習できる場
5. ボランティアや図書委員として活躍できる場
6. 読書ができる場
7. その他 ()

) 以上、ご協力ありがとうございました。